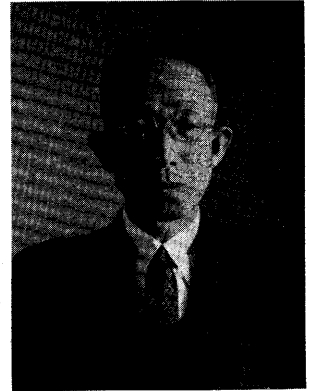


三つの思い出

兼重寛九郎

二代所長・東京大学教授



兼重教授

「十年ひとむかし」とはよくいったもので、ついこの間のことと思えるのに、ふりかえって見ると、いろいろなことが憶い出される。しかし、私のは所長在職中の3年間のこと、それは、8年前から5年前までのことであるから、あまり古くはないにしても、10年の歩みの中では前半に属する。この頃のように、テンポの速い世の中では、そろそろ忘れられてよいことであろう。そのうえ、人間は神様から授けられた、忘却というありがたい特権を持っている。私も大部分は忘れてしまった。自分に都合の悪いことは、特にそうである。これから記すことが、手前味噌や、自慢ばなしになるのは、そのせいだと許して頂きたい。

1. 工学部分校 生産技術研究所が生れてから、2年足らず経った昭和26年3月31日、東京大学第二工学部は、9年の歴史を閉じ、同じ日に、第二工学部としても、生産技術研究所としても、忘れることのできない恩人、瀬藤学部長兼所長が東大を去られたことは、「10年の歩み」を読まればわかるであろう。いよいよ学生がいなくなるということは、何となく淋しいことであった。ちょうどそのとき、特別な入学をした旧制高等学校卒業生がやって来た。これらの学生は、研究所に併置された工学部分校の在籍学生として、教育されることになっていたのである。4月1日から研究所長になった私は、分校主事という肩書も貰って、研究所については東大総長の、分校については工学部長の監督を受けなければならなかった。こう書くと私の立場は、大層複雑であったように見えるが、筋さえ弁まえていけば、別に困ることはなかった。この状態は、在職中の3年間続き、またそれで終わった。この分校学生の入学は、第二工学部時代に、むしろ進んで引受けたのであるから、多少の負担になっても、不平はいえない訳であったが、実際にも不平はなく、みんな一生懸命世話したと思う。昭和29年3月、これらの学生を送り出し、分校が廃止となったときには、第二工学部廃止の場合の感傷とは違って、ホッとした気持ちで、これから研究所として一本立ちになろうと決心したものは、私だけではなかったと思う。分校をおいたことは、有為な青年を世に送ったという貢献をしたばかりでなく、研究所の新発足のためにも、たしかに役に立ったと私は感じている。

2. 新制大学院 新しい大学院制度については、それより何年も前から、文部省や各大学で検討されていた。しかし、昭和28年3月、新制大学の卒業生が初めてできるのを前にして、私が所長になった頃には、その仕上げに忙しかった。当時、研究所長会議などで、盛んに議論されたことは、新制大学院における大学付置研究所の、あるいはその教授や助教授の役割であった。その頃、文部省や東大以外の多くの大学で考えられていたことは、旧制大学院と同様に、新制大学院もまた学部の上に設けらるべきで、研究所の人達は、その要請があった場合兼任の形で手伝えればよいというものであったようである。これに対して、研究所側は、学部と同等に考えるべきであるというので、私など、当時の大学学術局長、今の文部事務次官福田さんと議論を繰り返したことを覚えている。現在では、東大はじめ多くの大学で、研究所の人達も、学部のそれと同様に大学院に関係している。しかし、その後工学部に移った私の印象では、私の周囲だけのことも知れないが、学部の人達の方が、研究所の人達よりいくらか余計に苦心しているようである。

3. 財団法人「生産技術研究奨励会」 生産技術研究所は、設立の初めから、産業界と大学との連絡協力を密にするという方針で、瀬藤初代所長は、これの具体化にいろいろな構想を立てられた。昭和24年10月に設けられ、昨年まで続いた生産技術研究所協議会もその一つである。これは、産業界の有力な指導者達の意見を聴くために、相当効果を挙げたと考えられるが、研究所の機能を活発にするためには、これを助ける外郭団体を持つことがさらに望ましい。このような例は他の付置研究所にもある。私の在職中、昭和27年11月に「生産技術研究奨励会」という任意団体が設立され、これは、その翌年12月、財団法人の認可を受けた。この会は、多数のわが国産業界の有力会社を会員として、現在なお多くの援助を受けている。当初私は、2年半の間会費の払込を受ければ、その後は委託研究等により独立採算が可能になると信じ、その条件で入会を乞うた。しかし、その予想は実現されず、私の所長退職後、連続して会費の払込を受けることに変更された。もちろん、会員の承諾を得て行われたものであるけれども、私は、自分の見込違いを謝さなければならないと感じると同時に、その好意に深く感謝している次第である。